

○今昔館の近代展示室を愉しむ(5) 大大阪新開地—市街地の拡大と近代長屋—

シリーズ5回目は、「住まいの大阪六景」のひとつ、「大大阪新開地—市街地の拡大と近代長屋—」を取り上げます。

大正14年(1925)の「大大阪」誕生とともに新しく市域に編入された新市街地は「大大阪新開地」と呼ばれました。新市域では、組合施行による土地区画整理事業によって土地会社が宅地を開発し、その上に長屋建ての貸家を建設して大家に売却し、大家が賃貸住宅経営を行っていました。長屋住宅の一部に大家が居住する場合もありました。

『大大阪』という雑誌は、昭和7年(1932)から8年頃の土地区画整理地区の暮らしぶりについて、「大大阪新開地風景」と題したルポルタージュ記事を掲載しています。第1回目は旭区森小路付近を取り上げています。

大区画整理地—今福、野江、清水、森小路に亘る大区画整理地の風景は、大大阪市としては異色あるものである。大都市の目貫とまでは行かなくても、その動脈の一つたる京阪沿線にこれほどの大きな野原があらうとは、誰もが想像しなかつたところであらう。(中略)既に道路は、幾何学の線をもつて、将来の街路を截然と規定してある。新開地の風景ではないかもしれない。しかし未開地、新開地の中間の風景ではある。土地区画整理で道路がつくられ、間もなく建物が建てられていく状況を、未開地と新開地の中間と見立てて描写しています。新しく市域に編入された地域に共通の風景であったのでしょう。

この模型は、昭和10年(1935)頃の大大阪新開地—近代長屋住宅地の風景です。現在の阿倍野区、住吉区、住之江区辺りにある長屋を一つのまちに再編成したものです。伝統的な和風長屋住宅に加えて、邸宅風の長屋住宅や、洋風のモダンな長屋住宅の町並みが50分の1で再現されています。大大阪新開地は既成市街地の外周部に新たに開発された住宅地で、当時のニュータウンにあたります。



大大阪新開地(住まいの大阪六景)

■邸宅風の和風長屋



邸宅風の和風長屋

まず、伝統的な和風の近代長屋を見てみましょう。写真は、前庭のある和風長屋で、表には高塀をめぐらし、それぞれ玄関があります。邸宅風になっています。長屋はそれぞれ間口2間の4戸建てと、間口が2間より大きく、瓦屋根が少し高い2戸の合計6戸からなり、いずれも本二階建てで、2階の表側はガラス戸と縁を設けています。右端の住戸だけ間口が少し広く、前庭に洋風の部屋が飛び出しています。ここは長屋の家主さんの住宅です。残りの5戸は貸家(借家)で、「助産婦」の看板もかかっています。このような邸宅風の和風長屋は、昭和初期に登場しました。

右の写真は風呂屋(寿湯)です。長屋の中には内風呂がないものもあったので、地域に風呂屋が建てられました。入口や塀は洋風というか、中華風というか、不思議なデザインですね。8階の江戸時代の風呂屋さんの外観と比較してみると何か発見があるかもしれません。この模型はお正月なので、風呂屋の煙突に凧が引っかかっています。芸の細かいところもお見逃しなく。

右写真:風呂屋(寿湯)



この模型の中に、建てかけの長屋があります。瓦屋根がきちんと葺かれているので、上棟式は終わったのでしょうか。足場を組んで、左官工事や内装を行っている段階に見えます。職人の働きぶりをよく観察してください。当時、長屋の建設には、建売大工が活躍したそうです。建売大工は地主と交渉して土地を借り受け、その場所に長屋を建て、大工自らが買主(家主)を探して販売するというのが一般的であったそうです。



建設中の長屋

■洋風長屋

風呂屋さんを挟んで建てかけの長屋の反対側に4戸建ての洋風の長屋が2棟あります。写真の左の1棟は外観の模型、右の1棟は内部を表した模型です。



洋風長屋(外観と内部の間取り)

まず、外観の模型(写真の左側)を見てください。2階には洋風の出窓が付けられ、1階は陸屋根が少し張り出し、出入り口には洋風の玄関扉と門灯が付けられています。前庭は、低い塀が設けられています。和風長屋の高塀と比べると、ずいぶん開放的です。

つぎに内部を見てみましょう。洋風長屋の模型の直上写真をご覧ください。右側2戸は1階、左側2戸は2階を表わしています。4戸長屋の間取りと住生活がよくわかります。1階に台所、茶の間、玄関の間、6畳の間(床の間付)、縁側、風呂、便所があり、茶の間と6畳の間の間には廊下がとられています。2階には8畳の間と6畳の間、3畳の書斎があり、バルコニーがついています。前庭、裏庭付きで、よく考えられた間取りです。しかも、この間取りがピッタリとはまるように計画的に道路区画がなされ、背割には汲み取り通路が確保されています。当時の便所は水洗ではなかったもので、部屋の中を通らずに裏から汲み取りができるように工夫されています。

間口が2間半あることによって、8畳の間や床の間付きの6畳の間(もちろん奥行き半間の押し入れ付き)が

確保できます。また1間幅の玄関と4畳半(1間半)の茶の間を並べることができます。間口2間幅の間取りと比べて平面プランのバリエーションが増え、お屋敷に近い雰囲気も出せたのではないのでしょうか。おまけに戦前の畳は関西間(京間)で、メートル間に近い大きさですから、ゆとりがあります。

2戸ペアになっているのは玄関側だけで、奥は反転させずに風呂と便所が1戸分ずつ裏庭に突き出すようになっています。自然換気を重視して両面開放にしたのでしょうか？

この模型のもう一つの見どころは、長屋の暮らしぶりが再現されていることです。台所での炊事や茶の間での食事風景はもちろん、押入の中までのぞくことができます。



洋風長屋の間取り(右の2戸は1階、左の2戸は2階)

■住之江の洋風長屋

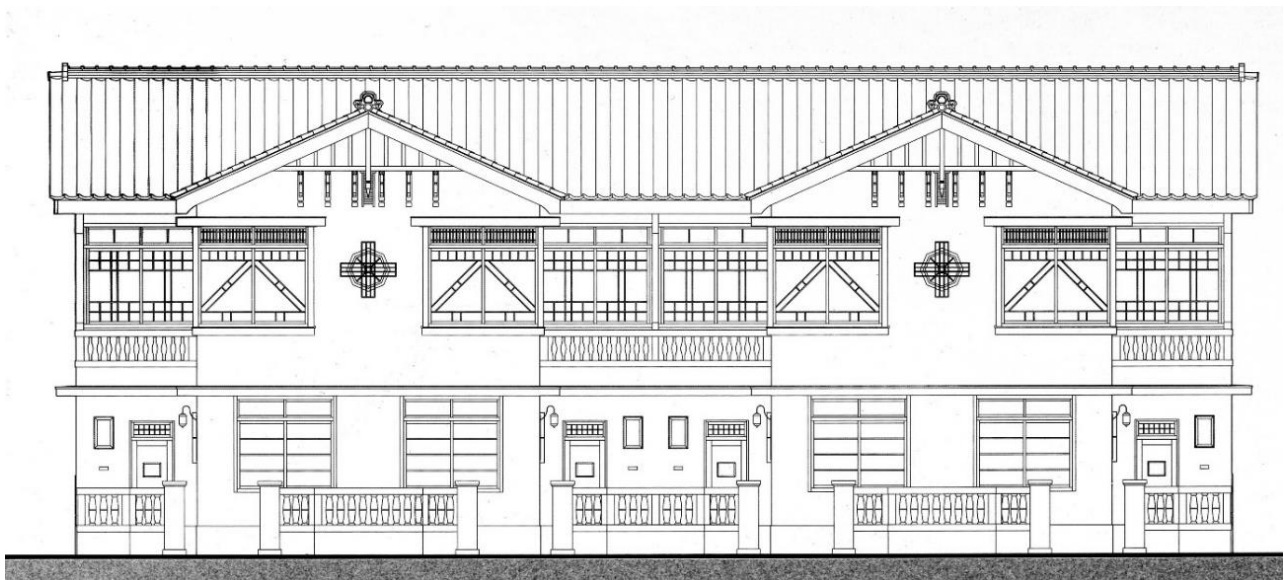
洋風の長屋住宅の中に、間口2間半でバルコニー付きの洋風長屋があります。左端は2戸1の長屋。隣は4戸で1棟の長屋です。2戸ペアでデザインされていて、手摺り子をもつ低い塀、2階窓の建具の組子、妻面のハーフティンバー(half timbering)など、おしゃれです。現在の大阪市住之江区西住之江に現存している長屋です。

ハーフティンバーを辞書で引くと、「木造住宅建築の一様式で、柱・梁・斜材などそのまま外部に現し、その間の壁体を石材・土壁あるいは煉瓦で充填したもの。イギリスでは1450～1650年ごろに盛んに行われた方式であるが、ドイツやフランスにも、その例が見られる。」(『建築大辞典』)とあります。



住之江の洋風長屋の外観写真

「近代都市住宅年表」の下段には、各時代の代表的な住宅の立面図が同じスケールで描かれています。年表の中ほど折れ曲がりの辺りには、住之江の洋風長屋が描かれています。この模型の制作のベースとなった4戸で1棟の洋風長屋の立面図です。



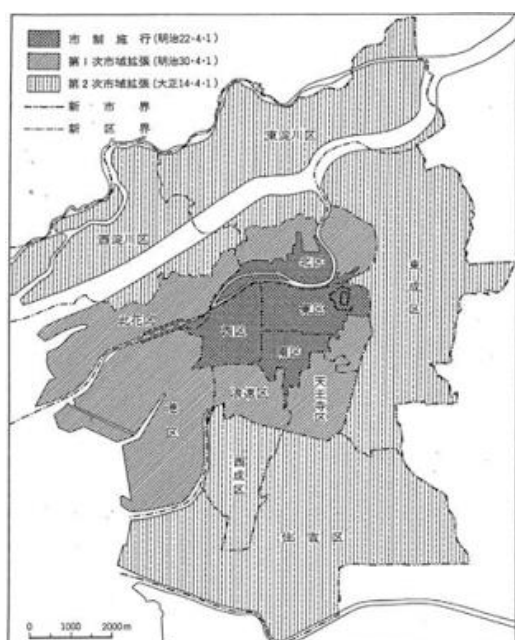
住之江の洋風長屋の立面図(「近代都市住宅年表」)

それでは、大阪市パンorama地図ではどのように描かれているか見てみましょう。といきたいところですが、「大
大阪新開地」はpanorama地図には描かれていません。



大阪市panorama地図の右下部分(大阪くらしの今昔館蔵)

panorama地図は大正13年1月の発行で、当時の大阪市は東西南北の4区の時代です。現在の阿倍野区、住
吉区、住之江区などは、翌年の大正14年(1925)に、第二次市域拡張によって大阪市内に含まれることとなり
ます。それで、現在の阿倍野区、住吉区などは描かれず、住吉神社のみが挿絵として描かれています。



大阪市の第2次市域拡張
(大阪市史編纂所『新修大阪市史第7巻』)

そこで、米軍が昭和23年(1948)に撮影した航空写真を、国土地理院が公開していますので、こちらで見ることになります。1枚目は阿倍野区阪南町付近で、組合施行区画整理の第1号である阪南土地区画整理事業によって街区が整備され、長屋が整然と建てられている様子がわかります。このあたりは戦災を免れましたので、昭和戦前に建てられた住宅が、そのまま残っています。



米軍の撮影による航空写真の阪南町付近(昭和23年、国土地理院HPより)

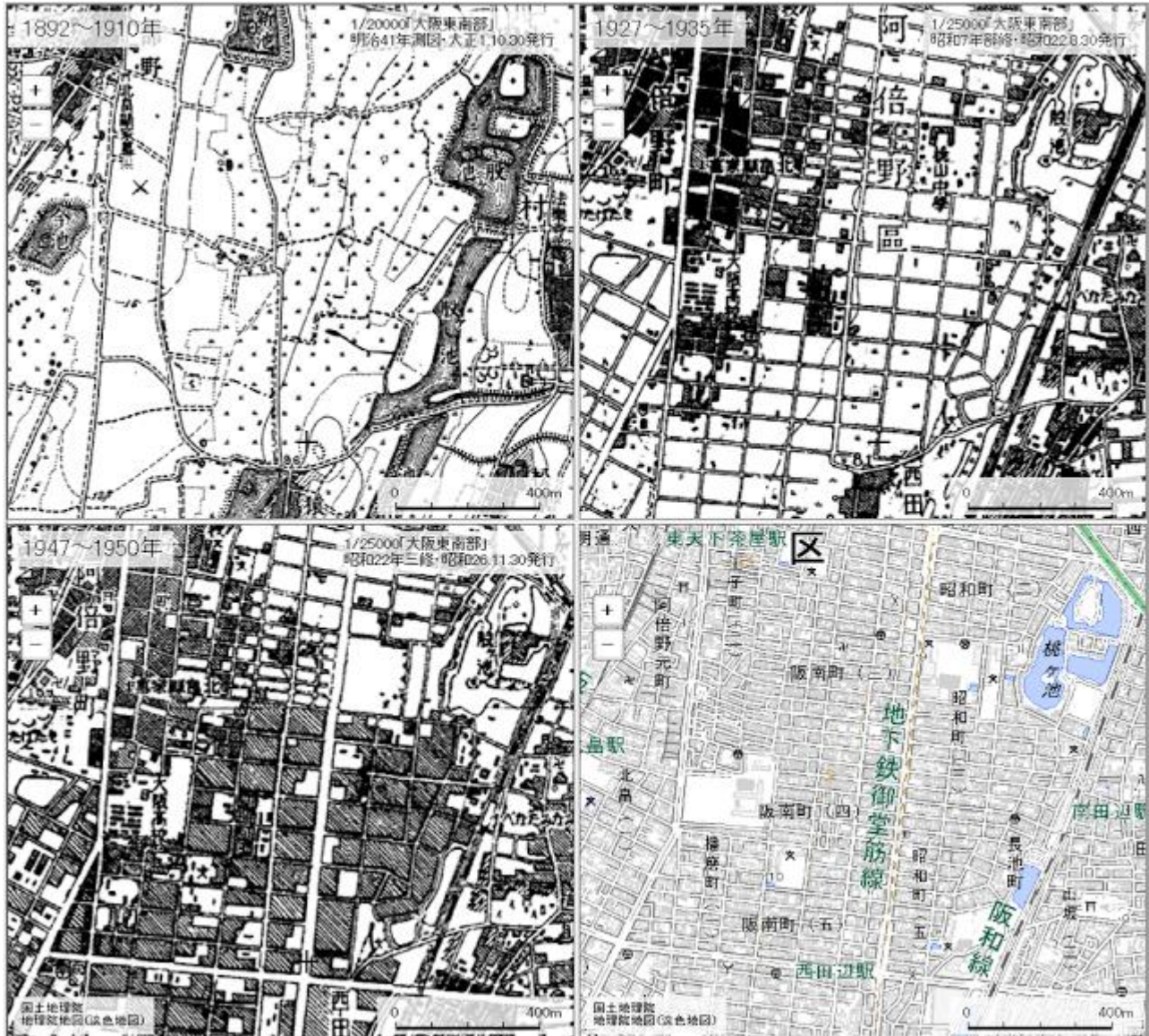
2枚目は、住之江区西住之江付近です。写真中央を南北に南海本線が走っています。その西側に長屋住宅地が形成されています。区画整理された街区の上に長屋が整然と建てられている様子がわかります。模型にある洋風長屋はこのあたりに建っています。南海本線と並行して東側には紀州街道が通っていますが、街道沿いの住宅と西側の新市街地とで住宅の大きさが違っていることもよくわかります。



米軍の撮影による航空写真の西住之江付近(昭和23年、国土地理院HPより)

最後に、今昔マップ3を使って、阿倍野区阪南町付近の変遷を見てみましょう。

左上は明治41年、股ヶ池(桃ヶ池)の西側一帯には田畑が広がっています。右上は昭和7年、組合施行の阪南土地区画整理事業によって街区が形成され、一部では長屋の建設が始まっています。左下は昭和22年、戦災を免れた長屋住宅地が広がっています。右下は、現在の国土地理院地図です。



明治41年・昭和7年・昭和22年の地形図、最近の国土地理院地図の
阪南町付近(今昔マップ3)

今回は、「住まいの大阪六景」のひとつ、「大大阪新開地一市街地の拡大と近代長屋一」について紹介しました。『まちに住まうー大阪都市住宅史』(平凡社刊、1989年)を参照しました。